

論文の和文 旨

論文題目

難民青少年の学校教育とアイデンティティ形成

氏名

ビビアンテルク

世界は現在、第二次世界大戦以来最悪の難民危機の一つを目撃しており、約6000万人人々が暴力、戦争、迫害から移住を余儀無くされている (MIFKJF, 2016)。その内「難民」の定義に該当する人々は2600万人であり、その半分以上を子どもが占めている (Save the Children, 2019b)。青少年難民は、その統計上の大きさだけの理由ではなく、世代を跨ぐ人類の課題であり、その生存と未来を保障すべく持続可能な解決策に向けて行動することは、政策立案者や研究者にとって急務である。本論文では、ホスト国における難民として生きる子どもと青少年のアイデンティティ形成について解明することを目的とする。主に質的研究手法を用いて、以下のリサーチクエッションを設定する。

- 難民として生きる子どもと青少年のアイデンティティ形成を先行研究はどのように扱っているか。
- 社会統合(integration)を基調とする受入国の難民政策の中で、学校教育は難民として生きる子どもと青少年のアイデンティティ形成にどのように影響を及ぼしているか。そして、受益者としての彼らはその経験をどのように受け止めているか。

本論文が取り上げるケースは、既に戦争による戦禍が拡大、長期化しているシリアから、ホスト国としてのドイツに逃れた難民に焦点を当てる。難民のアイデンティティ形成に関する研究の多くは、ホスト国の制度上の「移民」と「難民」の区別が曖昧になる定住後を対象に行われている。

本論文は、アイデンティティ形成が難民の子どもたちの未来に大きな影響を与え
るという認識の下、その区別をより明確に定義し、アイデンティティ形成への配慮はい
つ優先的になされるべきかを定義しようとするものである。そのために、難民として生
きる子どもたちの声や語りを考慮に入れることは、この集団にとってより効果的な教育
戦略を実現するための最も確実な方法である。

調査データによると、社会統合が既に標準値となっているホスト国では、難民
の子どもたちの教育において様々な試行錯誤が行われ、そのメリット、デメリットが指
摘されている。メリットの一つは、教育を経た難民の若者が新しい場所の労働市場で競
争できうる正式な資格を取得し、ホスト国の新しい環境で生活を再構築する十分な能力
があることを証明するものである。一方、デメリットとしては、ホスト国の文化に適応
しなければならない教育課程で、排他的な環境に直面し、難民の子どもたちの尊厳が損
なわれるなど、社会的・心理的にネガティブな現実が数多く存在することが挙げられ
る。

論文の構成

第1章では、研究テーマと研究対象を選択した根拠を展開する。ホスト国において完全
なる社会統合を目的とした学校教育の中で生きる難民の子どもたちの体験に焦点を当
て、それが彼らのアイデンティティ形成に及ぼす諸問題を解明する本研究の背景と目
的、リサーチクエッション、用語の定義を説明する。

第2章では、研究テーマに関連する先行研究を、まず包括的に網羅するために文献の「システマティックレビュー」を実施するに当たって、その手法の学術的正当性、メリット、デメリットを詳細する。その具体的な手法（Protocol, Eligibility criteria, Selection Process）について説明する。そこから得られた知見から、先行研究全般の限界と問題点を明らかにする。

第3章では、子どもと青少年層にとってのアイデンティティ形成の諸問題、そして教育が及ぼす影響について、システマティックレビューでは網羅できなかった要素を明らかにし、調査範囲を限定的に拡大し、先行研究レビューの全体的な総括を行う。

第4章では、この研究テーマの背景となる国際情勢を言及する。読者が本研究テーマをより良く理解できるように、本章第1部では、現代における難民一般、そしてシリアを起源とする難民問題の背景を詳述する。第2部では、ホスト国ドイツの移民・社会統合政策とその歴史的推移を、特に学校教育について、裏付けとなる事例の紹介を交えて詳述する。

第5章では、後の章で扱うシリア人難民4名を対象にしたインタビューの方法論と、その質的インタビューの構成、デザインの選択の根拠を議論する。倫理的プロトコル、サンプリングの根拠、参加者の募集方法について詳述する。更に、それを執り行う、同じシリア人であるインタビュアー、本論文執筆者に当然のこととして問われる偏向・先入観の可能性についても言及する。

第6章は、本論文のコアであり、シリア人難民4名を対象にしたインタビューの結果と分析を2つの部に分けて展開する。一部では、アイデンティティ形成分析に不可欠なインタビュー対象者各々の生い立ち、特にホスト国到着前後の個人史を紹介する。二部では、インタビューから読み取れる、個々の対象者が語る経験と認識のCoding コード化を試み、その項目を”theme”として抽出し、各themeごとに、各対象者のアイデンティティ形成がどのようなメカニズムで行われたかを詳細に議論する。

第7章では、本研究で得られた様々な知見を冒頭の二つのリサーチクエスチョンへの回答として要約する。そして、それがどう実際の教育政策とその運用に寄与するかを展望する。最後に、本研究の限界の分析と共に、今後の研究への提言をもって本論文の結論とする。